

報告

「英語の教え方教室」合宿 in 近江八幡

於：グリーンホテル Yes 近江八幡

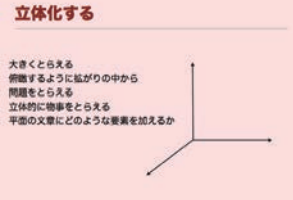
- ・明日からの授業実践のために — 英語授業の哲学 —
- ・こんな授業は面白い!
- ・みんなで知恵を出し合おう! 授業の悩み

中井 弘一 (大阪女学院大学)  
 松川 慈 (奈良県立高取国際高校)  
 参加者グループ討論



■ 開会挨拶 中西 勝弘 (滋賀県立八幡高校)

合宿運営幹事長の中西先生から開会の挨拶。2 府 4 県から大勢の参加者を得たことに謝辞を述べられて、勉強会が始まった。



■ 基調講演 「明日からの授業実践のために — 英語授業の哲学 —」

毎月大阪女学院大学で開かれている「英語の教え方教室」に参加されている先生方の有志がこの合宿が開催された。毎回の勉強会で我々発表者のフォローをしてくださり、残ったわずかな時間で、何百枚ものスライドを通し話して下さる中井先生が 90 分の基調講演をしてくださいました。その講演をまとめさせていただけることは非常に光栄で、一人でも多くの読者に、この講演の中身を味わっていただきたいと思い、合宿から帰宅してタイピングしている。講演を聴きたくても仕事の関係で不参加だった先生方にも読んでいただけたらと思い、38 ページのレジュメの内容を簡潔にまとめてみる。



キーワード2: 「生徒のために」

この言葉は夜の懇談会でのキーワードでもあるのだが(参加者のみぞ知る)、全ての授業は生徒のために我々教員は教材研究をする。予習ではなく、研究をするのである。教科書に載っている「メッセージ」「地図・写真」「語法」「表現」「語彙」「構文」「発展的思考」「活用」等をどうくみ取り、伝えていくのか。それが、創造的実行力なのであると中井先生は強調する。その力を行使するひとつの方法が、「立体化する」ことである。文字でいっばいの平面テキストからテキストを立体化するのに、音声や挿絵を使うことはもちろん、教師としての教材研究に次の7ステップが必要とされる。

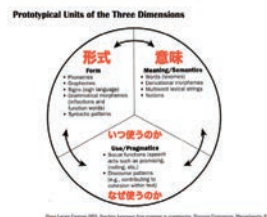
- ①テキストをまず直接に自分の知識、経験、思考・想像力を投入、反映させて多角的に読み取る。
- ②テキストの表面を立体化すること。言葉をイメージと状況に還元する。
- ③これを教えなければならない、ではなく、そのテキストに自分は何を読み取るのか。
- ④読みの深淺、共鳴。それが何を教えるのか決める。
- ⑤自分の読みと他者の読みを対比し、批判し、自分の意見を修正し、取捨選択する。
- ⑥立体化され、活性化され、鼓動しているテキストを、生徒にいかにか共鳴させるのか考える。
- ⑦教室の雰囲気・生徒の反応に敏感である。

このような立体化を目指し、サマリーを作成したり、表の作成を通し、実践されたことを紹介された。

言語習得も過程も、自転車理論で紹介された。Input → Intake → output の流れで習得はされるのだが、Intake の活動をメカニカル・ドリルだけ行うのではいけないと強調する。そこには意味がないといけない。自転車でもそうである。乗りたい、そして乗れるようになったら、遠くへ行きたい、という動機が存在する。英語学習でも同じで、内発的動機と自信をつけていかなければならない。前者は「英語は面白い」という実感を生徒にどう伝えるか。英語特有の表現や音声、そして構造。後者は他者とのやりとりの中で生まれると説く。参加者の中高の教員、学生はここで大きくうなずいた。なぜ英語が好きなのか、なぜ英語教員をめざすことになったのか。中井先生の言葉で改めて会場が共鳴した。

英語とは何か。コミュニケーションとは何か。言語とは何か。一言では言い表すことが難しい内容を、具体的に示していただいた。日本語と英語の距離の遠さを、「言語とは文化」という考えで説明された。日本語、つまり日本文化は高文脈文化; 状況言語であり、英語は低文脈文化; 言葉なのである。津軽海峡がなぜヒットしたのか。外国映画でなぜ I love you, honey がよく聞かれるのか、答えはそこにあるだろう。そういった違いがある点を認識したうえで、教員は英語指導、文法指導に留意しなければいけない。

5 文型、受動態、to 不定詞 ~ ing の形を単に教えるだけはいけない。筆者も大学時代に Lasen-freeman の Gramming という考え方に共感をした。文法指



2

キーワード1: 「創造的実行力」

中井流英語指導極意伝として、

- ①教師として信念をもつ
- ②ものの見方を広げる
- ③夢を語る
- ④心を開く
- ⑤英語学習の目標・景色を見せる
- ⑥創造する精神をもつ



の6つが紹介された。90分の話の中で、何度も出てきたことばが「創造的実行力」。とても一言では説明するのは難しいので、実に多くの実践例を紹介して下さった。中井先生は、この「創造的実行力」こそが「教師の全て」と言う。

創造性の定義としてヴァン・ファンジェは

- ①創造者とは、既存の要素から新しい組み合わせを達成する人である
- ②創造とは、この新しい組み合わせである。
- ③創造することは、既存の要素を新しく組み合わせることにすぎない。と言っている。Easier said than done という内容であるが、我々に、中井先生が 1975 年から実践されてきたことをやって見せてくださったので、参加者としてはどうということなのか考えることができた。

具体的には、

- ①発音指導の方法: Listen and repeat, 良く似た子音を何度も聞かせ、瞬間的に英単語を言い当てる。
- ②楽しく単語を学ぶ方法: クロスワード
- ③和文英訳 1000 題: 中学校3年間の本文を全て和訳し、それをもとに英文訳を作らせる。
- ④和訳並べ替え方式・穴埋め補充方式: 和訳を一文ずつ並べ、論理的に正しい順に並べる。

等、実に多くの実践例が紹介され、参加者一同が「おお」という雰囲気だった。次に、教科書のメッセージをどのように生徒のために解釈し、生徒たち伝えていくのか、教師の「教材研究」の視点をたくさん教えていただいた。

導は①形と②意味と③使用場面が必要なのである。コミュニケーションを語る上で、①と②だけを知っていても仕方ない。③の使用場面をしっかりと教え、使えるようにするのが我々の仕事である。覚える文法→考える文法→使う文法の流れの中で、最後に英語授業を英語でできるのである。多くの参加者の疑問がここで解けた。

最後に、本講演のキーワードを思い出してほしい。「創造的実行力」と「生徒のため」である。まとめとして、創造活動の流れを紹介する。①準備段階→②あなたため段階→③ひらめき段階→④検証の段階→⑤提示の段階である。これだけを読んでも、すぐにはできないことは誰も納得してもらえないだろう。だからこそ、日々考え、準備し、ひらめきを大切にしつつ、我々は実践をしていくのであろう。90分を超える、もっともっと聞きたい中井先生のお話を2ページでは到底説明しきれず、質問を持たれる読者も多いと察する。だからこそ問い続けてほしい。Are you an inquiry teacher?

報告：戸田 行彦（滋賀県立石山高等学校）

■ 実践発表・討論 「こんな授業は面白い！」

中学校と高等学校の両校種の勤務経験をされている松川先生からは、具体的な教材の提示や、先生自身による英語の歌等のデモンストレーションを通して、たいへん分かりやすく、また、生徒や教師の「創造的実行力」に直接つながる示唆に富んだ内容の発表をいただいた。



まず、中学校について、「英語の基礎の定着」と「四技能の総合的な指導が必要な実技教科として英語」という柱でお話された。

- 具体的提案として、
- ①リズムマシーンを使用した授業で英語のリズムを生徒に体得させ、日本語との違いに気づかせる指導
- ②Do動詞の「おぼえ歌」を「ドラえもんバージョン」で歌い、基礎的内容を早期に楽しく定着させる取り組み
- ③最終的に日本語を介在させなくてもイメージすることが可能な音読指導
- ④見やすい（つやのない）ラミネートをしたピクチャーカード（人間の表情等を表している）を使用し、視覚に訴えた基礎的な英文のスピード作成

などを紹介された。生徒の学力差にも対応可能な躍動感あふれる授業風景が目に見えそうな内容であった。

次に、高等学校については、新学習指導要領の導入に伴い、授業における英語を使用した効果的な言語活動について、あらゆる可能性について、日々工夫されておられる点をお話いただいた。

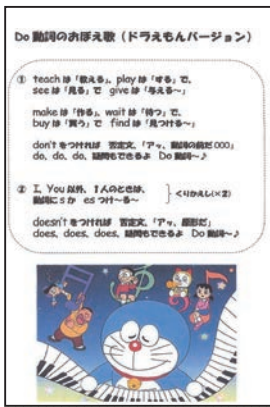
具体的実践例としては、今年度は英語科の担当教員が分担して3種類のワークシート（予習プリント・授業中に使用する活動ベースのプリント・復習プリント）を作成しているとのことであった。

語彙指導に関連した予習については、生徒は必ず紙辞書を用いて行い、授業では英英辞典を用いて、英語による表現の増強やより深い理解につながる指導に取り組んでおられる。

普段の授業では、生徒が主体的に学ぶ学習環境の構築に取り組みながら、英語力の向上を目指し、常に生徒の実態把握を怠らない姿勢などを大切にされている。授業内容についても、同じ言語活動を10分以上続けない等、生徒が飽きない進行に留意されているとのことであった。英語科の同僚性についても、教材や情報を適切にシェアされているのはもちろん、場面緘黙の生徒への時間をかけた丁寧な指導など、常に、対人コミュニケーションの温度を高くした状態で授業に取り組まれている。

会場からも、リズムマシンの使い方、忘れ物指導などについて、次々と質問が出された。

また、中井先生からのコメントとして、ワークシート作成の際は、必ず空所（空白）枠・部分を設け、notetakingやthinking、question cornerとして生徒自身が考える時間と場所を作っておくことが必要不可欠であることだと指摘された。これについては、例えば



英語教育を「線→平面→立体」の完成モデルで考えると、教員と生徒とのやりとり（interaction）の過程（線）で、新たな言語材料が“intake”となって記憶に定着（平面）し、さらに、生徒同士の英語によるinteractionやさらなる発展学習によって、生徒の本質的な新たな発見につなげていく（立体）ことが重要だということを確認できた。



末筆になるが、松川先生の貴重な発表に感謝の意を述べたい。先生からいただいた貴重な情報や資料に基づいて、我々も今後、生徒の関心が深まるような授業をめざしたいと思う。

報告：中西 勝弘（滋賀県立八幡高等学校）

■ グループ討論 「みんなで知恵を出し合おう！授業の悩み」

事前に寄せられていた主な疑問・悩みは、

- ・クラス内の学力差への対応、仮定法、関係代名詞、後置修飾など、生徒が理解しにくい文法事項の説明の仕方。学習を支えるバックグラウンドが欠けている生徒への対処。
  - ・コミュニケーション英語Ⅰについて、授業で英語を全く使わず、従来のGTMでやっている同僚とどのように計画を進めていけばよいか。複数で担当している場合、授業のやり方について、どれくらいの共通部分を教員間で保つべきか。評価評定の考え方をどう統一するか。
  - ・3年生対象の長文読解演習の授業を使用言語を英語にした場合コミュニケーションにするためには、どのように取り組めばいいのか？
- であった。これらをもとに、次の二つについて4グループに分けた2グループずつで話し合った。

その一つは、コミュニケーション英語Ⅰの指導で、論点を、英語の授業は英語で行うことを基本とするという方針の中、どんな言語活動を行っているのか、どのように同僚性を高めるのかの二点に絞って話し合ってもらった。参加者からは、基礎を復習しながら、英語を使うことを促していく、また、スピーキングだけでなく4技能トータルで活動を考えていくことが必要だという意見が出された。同僚性については、教材の共有化の方法などについて意見が出された。

もう一つは、高校3年生の授業で、問題演習だけにとどまらず言語活動を充実させるにはについて話し合ってもらった。参加者からは、入試で点を取る力を育成することと英語のスキルアップとの重なりはどのくらい密接なのかという意見が出された。また、入試英語長文と言語活動を対比した時、解決策は、wpmを意識する、推論質問をする、retellingの3つが出された。

最後に中井先生から、言語活動を英語で行う指導法を考えるといわゆるdirect methods、the audio-lingual method、the oral methodなどがあるが、それらは話し言葉を主に反復して習慣形成させるものである。そのことを考え、書き言葉の文字情報を理解し、話し言葉として図解による説明や英問英答をする必要がある。また、発音、シャドウイングなど基礎的な音声発話力の定着と思考力を鍛えてこそ、その後のディスカッションなどにつながる。一足飛びには無理がある。3年生の言語活動などについては、テキストのどこが究極の主張なのかを根拠を示させる主張タスクや、一つの質問で終わるのでなく相手の回答をもとに連鎖して尋ねる質問、ダブル・トリプルリーディング素材を用意し対比させたり予測せたりする、など読む指導を工夫するが必要である、といった助言を頂いた。

報告：二森 正人（兵庫県立尼崎小田高等学校）

■ 閉会挨拶 二森 正人（兵庫県立尼崎小田高校）

副運営幹事の二森先生から閉会の挨拶があり、勉強会は終了した。その後、別室に移動し、持ち寄った教材・資料をテーブルに並べて資料交換会を行った。



■ 資料交換 参加の先生、学生

英語プレゼンテーション、ことわざ、英語週末課題ワークシート、グループ学習の実践と課題、不規則変化活用表、英作文シートなどの資料を交換した。後日本学教員養成センター HP にアップする予定。